

『明日をひらく教育』1970年8月（日本映画教育協会）

情報社会と教育の技術革新

1. システム転換への要請

百年来近代化に向って努力に努力を重ねて来た日本教育も、いまあらためてその事を検討し直さなければならなくなったのではないか。われわれが百年来やって来た近代化とは一体何なのかを問い直す時が来ているようである。システムの転換が問題となり出したことが最も端的にそれをあらわすのではないか。百年来のシステムが変わるのは重大である。

システムのことが問題になっている根底には、われわれが意識する以上に重要な問題が含まれているようである。そのことを近代化とか現代化とかという百年来の概念でとらえることは、そのこと自体現在の問題に対する認識不足をあらわすものである。1970年代といわれるそのはじめの年に当って、このことを認識し直せるかが70年代の努力を効果あらしめるかをきめるであろうと思われる。はじめに結論的な方向を述べたが、以下具体的なことを考えてみよう。

2. 対話不在の教育からの脱出

つい最近東京都の教育研究所が高校生について調査した所によると、高校生の教師に対する不信の念は80%の生徒にあるという。一体このことを人々はどう受けとるのか。これは人生の問題として高校生にとっては大変な不幸である。信頼できない人に教育されているということは何と恐ろしいことか。教師にとっても、これはやり切れないことである。かりにも教育をするという活動をするとき、相手が自分を信頼していないという悲惨な事実が教育者がたえられるのか。

このことが一体われわれが百年来努力して来た教育の結果なのであろうか。何がおかしかったのか。どこがおかしかったのか。いや何がとかどこがとかという問題ですらないのではないか。教育の敗北ではないか。信頼なき人間関係の上になり立つ形式は教育ではないのではないか。しかし教育者は、それを教育と思って来たのである。だとしたら、われわれは教育ならざることを教育と錯覚していたといわざるを得ないではないか。これはもはや、近代化により解決するという問題ではないのである。より根底的という意味では近代化などという問題以前の問題であり、歴史的な近代化の努力の営みの結果出て来た問題だという意味では、近代化以後の問題なのである。その意味で本質に関する問題なのである。

教育としてやって来たことをひとつひとつ反省してみる。教育は人間と人間との対決の中にあるといわれる。そうではないという人もあるかも知れない。たとえば人間と物との対決の中に人間がつくられるという人もいるかも知れない。そのどちらかをきめることはしばらくおき、われわれのやって来た教育は、人間と人間、教師と生徒、生徒同志の対決ということをどれだけ実際に具現化して来たのか。どうもこう考えて来ると、必ずしもわれわれが思うほどにそのことは実現していないのではないか。「お前のその考え方は正しくないのではないか、それはこう考えるべきではないか」という対決、「お前のその行動は、こうすべきではないか」という対決が果して現在の教育の中にどれだけあるだろうか、残念ながら現在の教育の形で、それを実現することは不可能に近い。学級という集団に対し、こう考えるべきだ、こう行動すべきだということ

言うというようなことは、対決とはほど遠い。言う方も聞く方も、言葉にすぎないものをもてあそんでいるだけである。具体的な行動の場で「お前はこうしたが俺はこうする」というぎりぎりの対話があって、はじめて対決であろうに、そういうものがあるだろうか。集団を相手にするが故に、それは不可能だという言訳は、それが教育としては、著しく欠陥をもっていることを少しも減殺するものでない。対決の場は案外われわれが考えている教育の場の外にあったかも知れないが、教育の場には乏しかったのではないか。

教育が対決の乏しいままで百年も経過すると、いつの間にやら不感症となる。教師は知識の切り売りをするだけだという批判があっても、それを改める方法すら思い浮ばない。むしろますます切り売りの傾向が強まるばかりである。切り売りしたものをおぼえているかどうかのテストばかりが意識の前面に出て来る。そのテストは紙の上の言葉で行なわれる。空々しい限りである。紙の上に言葉が書けるかどうかの問題であるということの中にどこに人間の生きるという問題があるだろうか。空洞の教育がただ惰性の形で行なわれつづけている。それが学校紛争を招き、学生生徒の教師に対する不信の念となるのであろう。

3. 知識の呪縛からの脱出

知識の切り売りといわれても正直の所教師の側にはその自覚は余りないかも知れない。自分はそんなことはやっていないというように感ずる人が多いであろう。実はそのことが問題なのである。一生けんめい知識の切り売りでないことをやっている積りのことが、ただ知識の切り売りにすぎないということ、そのことが悲惨なことなのである。それは言いかえれば、これまでの教育はどう工夫してみてももう救いようがないということなのである。そこにシステムの転換の主張される理由もあるのであるが、つまり教育の全体の構えがかわらなければならぬ理由があるのである。

どう頑張ってみても現在までの教育は空虚な知識の注入という形を脱出することができない。そのことをこんどは、物と人間との対決ということ为例にとりて考えてみよう。太陽が地球のまわりをまわるのではなく、地球が太陽のまわりをまわるのだというのは、われわれの住んでいる環境のあり方について、対決の結果生み出されたものである。このことを言葉として学んだ経験は誰しもがもっている。人類はそういう世界の中で生きて来て、遂に月をも征服する一歩をふみ出した。こういう人間の行動をみると、天動説といわれるもの、地動説といわれるもの、つまりその時代、時代の知識は単に言葉ではなく、われわれの行動の仕方をつくっているのだとわかる。地動説といわれるものを言葉としておぼえていることが知識をもっていることなのではなく、そういう言葉で表現される考え方が行動の中で具体的に生きて働いていることなのである。環境に対する働きかけ方、環境の見方として行動となっている。つまり、人間のものと対決する仕方なのである。それが月へ一歩を印した行動となった。そういう対決の仕方をわれわれは毎日の生活の中で、環境との間に行なっていく。そこからわれわれ自身の生活の仕方もかわって来る。それが人間の成長である。教育という行動、学習という行動は本質的に上のような意味をもっていないてはならぬ。即ちものと対決して、それに対する行動の仕方を獲得して行くことなのである。自然科学的知識というものも本質的には、そういう人間の行動の仕方そのものであって、単なる言葉ではない。だから知識注入という概念はそういう点で根本的にピント外れである。言葉をおぼえるとか、言葉で説明してわかるということではないので、知識という言葉を使うなら知識的行動とでもいうべきであらう。

このように考えて来ると、従来教育の現場で行なわれて来た知識を注入するとか、理解させるとかという学習の実体は本質的な意味からかなり外れていたのではないか。根本的に反省をする必要がありそうである。ということは単に教師の活動の仕方、を改めればよいということだけではない、教科書とか教材とかいう学

習の場をつくっているものすべてが作り直され、おかれ直されねばならないのである。それこそがシステムの転換といわれることなのである。

4. 行動を育てる教材をさぐる

歴史の長い視聴覚教育運動も、これまでの所では教育の体質改善に力を発揮することができなかつたといつてよい。教科書教材と視聴覚教材とは本来教材としての機能は本質的に異なるのである。ところが現実の視聴覚教材は教科書教材と大して異なる所がないものとなっている。多少わかりがよいという程度のものとしてしかその意義を発揮していない。五十歩百歩なのである。つまり教科書は挿絵のあるお話の書いてあるものであるが、視聴覚教材は動く挿絵のあるお話なのである。ともにお話である点ではかわりがないのである。お話—これは知識という言葉におきかえてもよいが—を与えるという近世以来の教育のわくの中にある。

いわゆる知識とわれわれがよんでいるものは、環境の中での人間の行動を、言葉をもって再構成したものである。たとえば、「梅干はすっぱい」という単純な知識でも、それは梅干を口の中へいれ、それに対してつばが出たり顔面をゆがませたりした経験を言葉でもって表現したものである。言葉はわれわれの行動を細分化する働きをもっている。あるひとつのもの、たとえば梅干に、梅干という符号をつけるということになれば、それはそうでないものとの区別となる。梅干をつかむ手は梅干ではない。手という符号が与えられることになる。それをつかむ、口へ入れる、口の中にも歯があり、舌があるといった風に無限に細分化する。しかし細分化するだけでなく、一つの行動を、一つのものとしてまとめる働きもする。「梅干を口の中へいれたら、つばが出て、顔がゆがむ」それをすっぱいという言葉であらわせば、「梅干を口の中へいれるとすっぱく感ずる」となり、それを梅干のもつ性質としてみると「梅干はすっぱい」となる。梅干がすっぱいのか、人間の方がすっぱいのかといえ、実は人間がすっぱいのであるが、それを梅干の性質とする。そして梅干に関する知識をもっているとする。

こういう言葉として知識を与える、注入するというのが近世以来の考え方として強いのである。人間の能力を育てる、人間を育てるといふのは、言葉を与えることでなく、事実を測定すること、梅干にふれて口の中へ入れてみて、その行動を分析し、構成するという働きをつくることだということが忘れられているのである。ただ結論的な言葉を与えるのでなく、その結論を生み出すに至る、過程の思考力、行動力を育てることが問題なのである。梅干の例でいえば、食べてみる、それを分析して、総合してみるという所に学習があるのである。その行動場面に使われるのが教材なのである。

こういう考え方でみると、教科書の教材は、結論としての言葉が多く、学習のプロセスで使われる教材ではない。つまり人間を育てる教材ではない。しかしそれは実は視聴覚教材でも同様である。現実にはやはり結論を述べたものが多いのである。ただ動きがあるということで教科書より、より現実的な事実が出されているというにすぎない。結果としては、それが教科書教材とはちがった性格のものを生み出した場合もあるが、そういうのはむしろ偶然の産物で、全体としては言葉中心のものである。それはわれわれの教育観や教材観が近世以来の知識注入主義にあるからである。若しこの点を脱却して、視聴覚材料、映像を使いこなすことができたなら、全く新しい教材を生み出すことができ、人間の教育に大きな貢献をするであろうに。人間のもつものの考え方はなかなか歴史の歩みの外へは出られないものらしい。

5. 情報化社会の人間をさぐる

併し情報社会の到来などという言葉が流行し出したように、社会の生活全体が大きく転換しつつある。そ

してそれはそこに住む新しい人間像に変化をもたらすことが次第に自覚されて来だした。ゆっくりと、そしてはっきりとは目に見えないけれども、大きな変化が予想され出した。教育を考えるものはそういうものに対して鋭く目を働かさねばならないのである。今小学校の1年生が世に働くのは20年の後である。その時期に働く人間を育てるにはそれだけ未来のものに対するセンスを今から養ってやらなくてはならない。現代の中において未来のセンスを養ってやるのである。教育者が鋭い未来感覚をもつ必要があることはこの一事をもって明らかである。しかし現実には教育者が今過去をしか見ていないのは悲惨な事実ではないか。

情報化社会という言葉は、日本特有の言葉であるらしい。しかしともかく現代のいわゆる高度産業社会といわれる社会の次に来るものであることにちがいが無い。歴史は着実に一歩ずつ歩くものであるから、突如としてわけのわからない社会が来るはずはないのであって、現在が生み出すのであり、現在の矛盾が克服される形で生れ出るものであろう。それは自然にそうなるということではなく、そういう風にわれわれがやらなければ、われわれは破滅しなければならぬ。例えば公害が今叫ばれている。公害を克服しなければ、われわれは滅亡の道を行くしかない。したがって破滅したくなければ、公害のない環境をつくる努力をしなければならぬ。それは人間がそのように育てられなくてはならぬことをも意味する。公害に対する鋭いセンスをもった人間、公共の福祉に対して、鋭いセンスをもった人間が生れ出ることによってわれわれの社会は存在し得るのである。このようにして人間像が転換してゆくのである。

情報化社会という日本特有の言葉が使われるのはやはり日本の社会の歴史的な体質から来るものであろう。新しい社会を欧米の人達は、ポストインダストリーとか、知識社会とかという。そこには彼等が自らの力で作りあげて来たものに対する切実な感慨が含まれている。産業の社会をつくった彼等が、その次に来るものを産業とはちがった感覚でとらえているのである。それを知識という言葉で彼等が言うのは、日本人にとっては異様な感があるかも知れない。そこに彼等の知識観がある。知識とは彼等にとって産業社会という繁栄を生み出した源泉である。彼等は自らの力で新たな知識を生み出したのである。それが今の繁栄を生み出した。更にこれからの社会を生み出すには、新たなものを生み出さなければならぬという予測がある。

日本人には知識というのはそれを生み出すという感覚では受けとられない。それは誰かが生み出したものである。これは後進国として出発し、百年来受けとる立場におかれた民族の宿命的な感覚かも知れない。その点では知識社会などというより情報社会という方が日本人むきであるかも知れない。しかしこの言葉も必ずしも適切ではない。われわれの情報という感覚は新聞のニュース位の意味しかない。

ただ最近コンピューターの普及と共に情報処理という言葉が生み出された。情報を処理することによって、加工された情報がわれわれの手もとにとどくのである。そのプロセスの処理の過程がわれわれの意識にのぼって来たのは日本人にとっては重大である。

情報は受けとるものとしてあるのではなく、処理のプロセスを経て、生み出されるものである。そのことがこれからは重要な人間の仕事となる、ということである。これは教育に対する大きな変革を要請するであろう。情報（知識）を受けとるものと考えた時代は、教育は情報を伝達し記憶する教育であるが、これを生み出すことが問題になれば、教育もこれを生み出す教育にかわらなければならぬのである。教育の質の転換はかくして新たな未来社会への動きが要請して来ているのである。

6. 近代の否定の上に新たな教育が

さきに梅干はすっぱいというのは知識であると述べたが、これは梅干というものに人間が働きかけて、そこから作り出した情報なのである。そこには自分の行動を分析し、ひとつひとつの行動をはっきり分け、

それをはっきりと他のことがらと区別し、それを組み立てるという処理過程がある。あらゆる情報、知識といわれるものはすべてこういうように事実人間が働きかけ、そこから生み出されるのである。この過程でどれだけ正しく神経が使われるかで正しい情報、知識となるか、そうでないかがきまるのである。この能力がどれだけすぐれているか、つまりそういう場での神経の使い方がどれだけ正確で、スピーディーかで人間の生み出す情報が正確で多量になるかがきまる。そういうことが人間の社会を豊かにするかしらないかをきめるであろう。すべての人間が正しく、事実を把握し、正しい情報を生み出すことができるかどうかで、すべての人間の福祉が実現するかしらないかがきまる。たとえば公害は一部の人間が情報を持ち、それを独占し、それを秘密にし、そして他人を圧迫することによって生じている。正しい情報が万人によって所有され、万人が正しい情報を生み出し、また他人の生み出した情報の正否を見抜くかによって、万人の幸福な社会が生れる。

万人にそういう能力を付与することは、未来の社会にとって必須のものとなるであろう。今公害の例で述べたが、政治も経済も教育もその他すべてのことが、万人の情報処理能力の有無によって、正しくバランスのとれたものとなるかどうかにかきまるといってよい。そこに、教育の目標が、自ら情報を生み出す能力—それは事実を分析し、新たな知識として再構成する能力である—をめざすことになる。過去の教育が生み出された情報をただ言葉として、つまり観念として与える教育であったことを根本的に反省しなければならぬのである。

情報化時代が来るというのを、情報を伝達する機器が多様になったという考え方でしか見ない人が多い。そんな形の問題ではないことを明らかに認識しなければならぬのである。そういう外形、ものの変化にしか進歩をみることができないのは、情けないことである。人間の進歩は人間自身の進歩にあるのであってそれがなければむしろ滅亡するかも知れない。マンモスが自分の体を処理することが出来なくて滅亡したように、ものみの巨大化は人間を滅亡させることは間違いない。一体東海道線が新幹線になったことに何の進歩があるのか。そういう形のみならば、それは進歩でも何でもない。進歩の概念をあらためて反省してみる必要があるであろう。

情報化時代というのは、近世の物質的進歩に対して、人間の側の能力の進歩、人間のもつ働きの進歩を問題にしているのである。そこにポストインダストリーの意味がある。物をつくり出す産業に関心がむいた時代にかわって、人間の能力—それは知力であり、道徳力であり、情緒力である—を発達させる時代としてとらえられなければならない。ということは、産業を否定することでない。これを人間のために使う時代なのである。

経済成長が社会にさまざまなひずみを生み出した。日本は世界中で最もきたない国だという批判がある。それは日本人の人間としての能力が貧困であることを意味する。ものをわれわれ人間のために使うことができないのである。そして他人をごまかし、自らをごまかしている。エコノミックアニマルといわれる所以である。それはいたずらに形ばかり大きくなって、滅亡したマンモスに似てはいはしないか。自分の体を自分で扱うことのできない知力のないマンモスとなってはならないのである。

そのことに対する警告が、今あらゆる形でわれわれの周囲に現象としておこっている。人間を育てる教育者がそれに不感症であるならば、誰がこの天の警告を警告として生かすことができようか。教育者はこの警告を教育の体質を改善する実行に移す責任があるのである。

(矢口 新)